

名医か、やぶ医者か

—— ハンス・ザックス謝肉祭劇第11番『阿呆の切開手術』における「医者」とルター的万人祭司 ——

田島 篤史

はじめに

祝祭の時期になると、心躍らせる人は多いだろう。謝肉祭のように熱狂的な祭であればなおさらである。ドイツ語圏の謝肉祭には、都市ごとに様々な特徴がみられるが、それらは形態的相違のみならず、祝祭期間中の各種催しにも現れている。こうした催しのうち、文学史的にも文化史的にも重要視され、しばしば取りあげられてきたのが謝肉祭劇である。

中世以来、多くの演劇が上演されてきたが、降誕祭劇や復活祭劇をはじめとした宗教劇とは異なり、謝肉祭劇は人々を楽しませたり笑わせたりすることを目的とした世俗劇である。たしかに宗教劇も次第に娯楽的要素が付け加えられていったが、本来的には典礼暦に則って催される教会の祝祭から発展してきものであるため、様式が厳格に定められていたのであり、そもそもが娯楽として誕生した謝肉祭劇とは一線を画する。また内容的にも、聖書からも題材をとる宗教劇とは異なり、謝肉祭劇は、不倫もの、裁判もの、口論もの、やぶ医者もの、阿呆もの、政治風刺、笑話・伝説から取られたモチーフなど、下世話な話がほとんどである¹。

謝肉祭劇は、すでに15世紀のうちにニュルンベルクでみられたが、その最盛期は16世紀であり、ハンス・ザックスによって大成された。

1 フリッツ・マルティニーニ（高木実、尾崎盛景、棗田光行、山田広明）『ドイツ文学史—原初から現代まで—』、三修社、1979年、94-95ページ。

ザックスの生涯については非常に多くの研究があり²、かなり仔細なことまでわかっているため、ここでいちいち彼の誕生まで振り返って述べるようなことはしない。しかし一つ指摘しておかねばならないのは、近世ドイツを代表する作家であるザックスの諸作品は、彼の生涯ほどよくは知られていない、という事実である。このことについて明確な理由はわからないものの、おそらくはザックスの旺盛な創作意欲と無関係ではあるまい。すなわち、ザックスは80余年の生涯において、判明しているだけで、職匠歌4374編、対話詩・宗教詩・滑稽詩・史詩など1618編、悲劇61編、喜劇64編、そして謝肉祭劇85編、計6202編を創作しているのである³。これだけ多作のため、どれを代表作とするかは決めがたく、またジャンルをまたいだ創作活動でもあるため、ザックスのアイデンティティをどこに見出すべきか決断に窮しもする。それゆえザックス作品、とりわけ彼の謝肉祭劇は、個々の作品分析というよりはむしろ、一つのジャンルをなすものとして複数の作品が、あるいは他の作家の作品とともに論じられる傾向にある⁴。

しかしこうした個々の作品研究の進みがたい現状が、研究自体を不要だと判ずる根拠になりはしない。むしろ近世ドイツにおける文学的特徴のみならず、この時期大きく花開いた市民文化を代表するものとして、当代一の作家が残した多くの作品は、これ以上ない研究可能性を秘めていると言えよう。以下本稿では、ハンス・ザックス謝肉祭劇第11番『阿呆の切開手術 (Narren-schneyden)』を取りあげ、本作品を当時の社

2 さしあたり、以下を挙げておく。Bernstein Eckhard: *Hans Sachs*. Reinbek: 1993.

3 藤代幸一、田中道夫(編訳)『ハンス・ザックス謝肉祭劇全集』、高梨書店、1994年、957ページ。

4 比較的近年の研究では、以下の2編がある。Javor Briški, Marija: „Eifersucht und Frauenlist: Boccaccios Decameron und seine Rezeption in der frühen Neuzeit am Beispiel von Hans Sachsens Fastnachtspiel Der gross Eyferer, der sein Weib Beicht höret“. In: *Acta neophilologica*, Bd. 47, 2014, S. 73-85; Tailby, John E.: „Hans Sachs and the Nuremberg Fastnachtspiel tradition of the fifteenth century“. In: *Hans Sachs and Folk Theatre in the Late Middle Ages: Studies in the History of Popular Culture*. Lewiston/ Queenston/ Lampeter: 1995, S. 187-195.

会情勢を踏まえた「作者の意図⁵」を意識しつつ読み解いていきたい⁶。

『阿呆の切開手術』

まずは、本稿における分析対象『阿呆の切開手術』についての位置づけからみていく。本作品は85編あるザックスの謝肉祭劇のうちの11番目、作品全体としては747番目にあたる。この番号は、ザックス自身が作成した『総索引』が現存しており、それに則ったものであるが、この中に謝肉祭劇の索引もあって、ほぼ制作年代順に並べられている。テキストの最後に「1557年10月3日」という日付があるが、これは初版刊行年にあわせて挿入された日付のようで、作品自体が完成した年ではないとされている。19世紀の研究者で、A. v. ケラー (Adelbert von Keller) とともにザックス作品の全集を編纂したE. ゲッツェ (Edmund Goetze) によっても、文体的特徴などから1536年の作だとされており、多くの研究者がこれに倣っている。

『阿呆の切開手術』は、医者・下男・患者の3名が登場する380行⁷からなる一幕物の謝肉祭劇であり、あらすじは以下の通りである。下男を

5 この用語に関しては、ルイス・キャロルが以下の研究において唱えた意味を用いる。すなわちキャロルは、芸術作品とは価値の創造者たる芸術家が意図的に作り出すものであるとし、作品の位置する歴史的な文脈とカテゴリーの中で「作者の意図」に基づいて作品批評を行うべきだとしている。Carroll, Noël, *On Criticism*. Routledge: 2009 (森功次訳『批評について—芸術批評の哲学—』、勁草書房、2017年)。

6 作品分析に際して、以下を底本として用いた。von Keller, Adelbert und Edmund Goetze (Hrsg.), *Hans Sachs*, V, Tübingen, 1870 (wiedergedruckt 2018); Goetz, Edmund (Hrsg.), *Sämtliche Fastnachtspiele von Hans Sachs*, Bd. 1, Halle an der Saale: 1880. また以下の邦訳も参照した。藤代幸一、田中道夫 (訳) 『ハンス・ザックス謝肉祭劇集』、南江堂、1979年および藤代・田中 1994年。これら二つは同訳である。永野藤夫「謝肉祭劇選」、『ルネサンス文学集』(世界文学大系74)、筑摩書房、1964年、371-377ページ。

7 ゲッツェは380行としているが、藤代・田中両氏は379行としている。これは、揚格が4つに満たない行は不完全行として総行数には算入しない、という数え方のためである。本稿ではゲッツェに倣った。藤代・田中 1994年、1および9ページを参照。

連れた医者が自らの有能ぶりを喧伝し、病人を探し求める場面から始まる。そこに太鼓腹を抱えた患者が杖をついてやって来て治療を請う。医者は患者の小便を取り、調べてみたところ、患者の身体には阿呆が巣くっていることが判明したため、手遅れにならないうちに切開手術によって摘出することを提案する。患者は、死の危険がある手術自体は不安なく受け入れるが、費用を心配しており、金額を問うたところ、医者は無料で請け負う旨を伝える。

すぐさま手術がはじめられ、医者と下男は患者の体内から阿呆を摘出していく。阿呆が取り出されるたびに、医者はそれがどのような阿呆であるのかを患者に説いていく。三者の軽妙なやりとりのもと、これが7度繰り返された後、これ以上阿呆が増殖せぬようにと、最後に阿呆の巣を摘出する。医者は下男に命じて、先に摘出した阿呆とともにその巣をペグニッツ川へと投げ込ませる。体内から阿呆が一掃された患者は、縫合されて本復し、医者を褒め称えとともに、指摘されたこれまでの自堕落な生活を反省し、改心する。結びの口上では、阿呆の巣くった患者を反面教師に、観衆にも教訓が述べ伝えられ、閉幕となる。

上述の通り、ザックスの個々の作品に関する研究は少ない。本作『阿呆の切開手術』についても、作品分析を行った研究は、管見の限り、R. E. シャーデ (Richard Erich Schade) および R. E. レムシャート (Ralf Erik Remshardt) の二つしかなく、いずれも1980年代に書かれた英語圏の研究である⁸。前者は、医学的メタファーの機能的役割を強調し、医者・下男・患者のやりとりを教訓的アレゴリーとして解釈している。後者は、当時の文学的伝統・潮流を踏まえたうえで、登場人物および彼ら三者のやりとりに詳細な意義づけを行ったものである。しかし後述するが、レムシャートの分析には恣意的な解釈が散見され、とりわけ作品の本質的理解においては説得力に欠けると言わざるを得ない。

以下本稿では、登場人物のうち、とりわけ医者に焦点を当て、作品分

8 Schade, Richard Eric: „Das Narren schneyden“ (1557): The Deadly Sins and the Didactics of Hans Sachs“. In: Ders. (Hrsg.), *Studies in Early German Comedy, 1500-1650*, (Studies in German Literature, Language and Culture, Vol. 24), Columbia: 1987, S. 73-95; Remshardt, Ralf Erik: „The Birth of Reason from the Spirit of Carnival: Hans Sachs and Das Narren-Schneyden“, *Comparative Drama*, vol. 23, 1989, S. 70-94.

析を進めていく。

誰が何を摘出するのか

本作品のタイトルにも含まれる「阿呆 (Narren)」とはなにか。作中で摘出される阿呆は全部で7つ、すなわち傲慢 (hoffart)、貪欲 (geitzigkeit)、嫉妬 (neydig)、姦淫 (unkeusch)、暴飲暴食 (füllerey)、怒り (zornig)、怠惰 (aller-fewlest) である⁹。これらはキリスト教における「七つの大罪」を示しており、先行研究においてもこの解釈は一致している。中世末以来、「阿呆」は多くの作家たちによって取りあげられた題材であり、「阿呆文学」なるジャンルも生まれた。ザックスは、こうした伝統的題材を用いてはいるが、これに大罪というキリスト教的概念を統合させ、それらを病気として扱うことで、「阿呆」の新たな見せ方を提示している。本来罪とは、それ自体は非物質的かつ不可視的な概念であるが、これらを擬人化ならぬ「擬病化」とでも呼ぶべき手法で可視

化させ、その摘出の過程を滑稽なやりとりでもって笑いに昇華させ、さらには教訓譚として描き出しているのである【左図参照】¹⁰。またレムシャートも述べているように、患者の腹の中に阿呆がいるのは、謝肉祭劇によくある「男性の妊娠」のモチーフであり¹¹、これらが絶妙に組み合わせることで、



9 「嫉妬」、「怒り」、「怠惰」は、形容詞のかたちで用いられている。

10 『阿呆の切開手術』の木版挿絵である。原典にアクセスできなかったため、藤代・田中 (1979年)、150ページから引用した。この挿絵から、当時の舞台では、小さな人形を用いて阿呆の摘出の場面を演じていたことがわかる。

11 レムシャートは、患者の腹の中にある小さな阿呆を「男性の妊娠」のモチーフとの関連以外に、パラケルススの作中に出てくるホームクルスとの類似も指摘し

本作品は単なる「阿呆もの」の枠に収まらない複雑さを呈している。

こうした「阿呆」の描き方一つを取りあげても、本作の新規性が垣間見え、明白な文学史的意義を見出すことができるのだが、上記の他にも伝統的題材を用いた新たな技巧がみられる。すなわち「医者」の描き方である。「医者もの」も、謝肉祭劇の定番の一つであるが、ザックスの描く医者にはある特徴がある。謝肉祭劇における医者とは、多くの場合、「やぶ医者」であり、彼ら自身に医者としての腕前が備わっているかどうかにかかわらず、手練手管を弄して患者から金をだまし取ろうとしたり、あるいは患者の病気を治療できずに終わることが多い。そこにこそ笑いの生じる要素があるのだが、しかしザックスの医者は、必ずしもやぶ医者ではない。ザックスの手がけた謝肉祭劇で、『阿呆の切開手術』の他に医者が登場するのは、第16番『腹ぼて百姓』（1544年）、第17番『悪徳の薬』（1544年）、第76番『悪魔が老婆を娶る』（1557年）、第80番『仔馬をはらんだ百姓』（1559年）である。これらのうち『阿呆の切開手術』と『悪徳の薬』に出てくる医者は、やぶ医者ではなく、名医である。

『悪徳の薬』は306行からなる登場人物5名の謝肉祭劇である。焼餅やき・けちん坊・ねたみ屋・怒りん坊という患者が次々に医者のもとにやってきて、診察を受ける。患者たちは、各々の名前が示している病状を医者に説明し、「薬」として忠告を授かる。最後に結びの口上として、医者から観衆に向けても「薬」が説かれる、という話である。名医による医療行為を通じて劇が進んでいくのは『阿呆の切開手術』と同じであるが、そこには阿呆や大罪などの伝統的モチーフと病気とを重ね合わせるような工夫もなく、笑わせるというよりも、教訓を与えることに終始している。その意味では、『悪徳の薬』は、謝肉祭劇として極めて特異な作品である。しかしここで描かれる医者は、名医であること以外の特徴をみせずにいるため、これ以上の分析は容易ではない。『悪徳の薬』の制作年は1544年であり、1536年の作とされる『阿呆の切開手術』において生み出された「名医」という新しい医者象の二番煎じなのである

ている。曰く、「へそに大きな注ぎ口を取り付けられて座らされている男の膨れた腹から、ホムンクルスを摘出する錬金術師」の描写に出くわしたという。Ibid, S. 81.

う。「名医」を主役として『悪徳の薬』を創作したということは、この新たな医者象にザックス自身がある程度手応えを感じてのことであろうが、しかし『悪徳の薬』以後の「医者もの」では、再び「やぶ医者」に戻っており、二度と「名医」が登場することはなかった。このことから、『悪徳の薬』の自己評価は、決して高い物ではなかったのではないかと推察される。

つまり「名医」という謝肉祭劇史上希有な医者像を分析するには、『阿呆の切開手術』において他になく、この登場人物のうちにこそ、ザックスの「作者の意図」が現れているのではないかと考えられるのである。

外科医の「名医」

今日では医師を生業とするためには、大学の医学部で学んだ後に、国家資格を取得してはじめてその第一歩を踏み出すことができる。社会的地位も非常に高く、それに見合った報酬も受け取ることができる職業である。では16世紀のドイツにおいては、いかなる存在であったのか。

13世紀以来、ヨーロッパでは大学の医学部で専門的に医学を修める者たちはいたが、彼らは高貴な出自の者たちがほとんどであった。しかし、こうした大学で学ぶ医学はスコラ学的な思索活動を伴うものであって、実践からは遠く離れていた¹²。『阿呆の切開手術』に登場する医者は、切開手術を施していることから外科医であることがわかるが、中世以来、ドイツ語圏において外科的な医療行為を実践していたのは、大学で医学を学んだ者たちではなく、風呂屋（Bader）や理髪師（Barbiere）であった。中世の公衆浴場では、彼ら風呂屋・理髪師たちは客の髪や髭の手入れだけでなく、入浴後に爪を切ったり、魚の目を取ったり、また膿瘍を開き、悪い歯を抜き、血行を良くするために瀉血や放血まで行っていた。中世後期以降は、簡単な手術や脱臼の整復なども行うようになった¹³。

12 Burger, Heinrich und Marie geb. Krackhardt: „Bader-Chirurgen und Wundärzte der fränkischen Krackhardt“. In: *Blätter für fränkische Familienkunde* 20, 1997, S. 206.

13 Michel, Wolfgang: *Leipziger Fehlgriffe*: „Zum Konflikt zwischen Badern und Barbieren

15 - 16 世紀になると、銃創を熱した油で消毒し、縫合までこなしている。また焼きごてを用いて止血したり、骨折した腕に伸長装置を用いたり、歯のヤスリがけ、差し歯や義鼻の使用、さらには膀胱結石を除去した記録まである。当初理髪師は、助手として風呂屋に雇われるかたちでこれらの業務に当たっていたのだが、次第にそれぞれギルドを形成し、両者は各地でしばしば衝突するようになった。当然のことながら、彼ら「外科医」の社会的地位は、現代における外科医とは比べようもないほど低いものであり、最終的にすべての医療行為は、大学を出た医師に委ねられることになった¹⁴。16 世紀の外科医療を担っていたのは、このような者たちであった。

『阿呆の切開手術』の医者が、風呂屋もしくは理髪師として生計を立てていたかどうかまではわからないが、外科医療の心得があることは間違いない。レムシャートは、この外科医を終始「やぶ医者 (quack)」と呼んでいる。たしかに医者が登場する場面では、自分の有能さを喧伝しながら現れるという、型通りの「やぶ医者」であり、また切開手術の前の診察では患者の小便を取り、それを調べて診たてを述べるという、これまた「やぶ医者」の典型的なやりとりをみせている。しかしレムシャートは、この登場人物が治療の報酬を受け取ろうとしないことについては、「やぶ医者としては極めてめずらしく (most unusually for a quack)」と述べているように、やはり違和感を覚えているようであるが、それを当時のニュルンベルクの社会的背景を持ち出して説明する。すなわち、「この医者は、貧者に無償で医療を提供していた 16 世紀のニュルンベルクの『社会化された (socialized)』医療の線上に位置している」からであると説き、さらにこの医者こそが作者ザックスであると断言するのである。そしてレムシャートは以下のように述べる。

(その医者は、) 笑いを引き起こす仰々しい場違いのユーモアという、予測可能ないたずらを約束することで、謝肉祭劇の観衆を魅了しているが、しかしその代わりに、優れた寓話の能力でもってそのいたずらを提示している作者なのである。このことは、ザックス自

im 17. Jahrhundert". In: *Studies in Languages and Cultures*, No. 6, 1995, S. 110.

14 Burger (1997), S. 207.

身が、作者かつ役者として、熟練した演劇上の奇抜な手段によって、道徳的な外科医の役割を果たしていると考えていることを暗示しているのであり、この外科医は、社会的な衛生学上の等しく巧みな芸当を試みているのである […]。『阿呆の切開手術』における医者 (physician) は、社会風刺の仮面をつけた登場人物であり、それと同時に、民衆文学においていつも対立的な立場に置かれるいたずら者の救済者である。全体的にみれば、これらは一種のシャーマンの権威であり、まさにデヴィッド・ブレット＝エヴァンズが主張していたのであるが、やぶ医者劇は「キリスト教以前の死と再生の魔法 (pre-Christian death-and-resurrection spellcraft)」を用いているのである¹⁵。

明らかに「社会化されていない」流しの医者や、当時のニュルンベルクの秩序の中に無理やり組み込んで捉えるのは、論理的に矛盾してはいないだろうか。また本作を手がけたのがザックスである以上、彼の作劇における様々な仕掛けの一つとして、その登場人物を「社会風刺の仮面をつけた […] いたずら者の救済者」と解釈することは可能であるかもしれないが、それがザックス本人であって、しかもこの劇中にキリスト教以前のシャーマニズムを読み取ろうとするのは、論理の飛躍がはなはだしく、説得力に欠けると言わざるを得ない。さらにレムシャートは続ける。

しかし、この健康を取り戻すための手術の背後にいるそのシャーマンが誰であるのかということは、私の胸中には疑いがない。ザックスの医者のもつもう一つの名は、明らかにマルティン・ルター博士である¹⁶。

このように述べたあとで、その根拠として、ザックスが熱烈なルター支持者であったこと、さらにルターによるエラスムス批判のうちに、「もし私がエラスムスの心の蔵を切り開くことができたなら、三位一体

15 Remshardt (1989), S. 77.

16 Ibid.

や聖なる秘蹟をあざけり、愚かに笑っている口を見つかるだろう」という類似のイメージを発見したことを挙げている¹⁷。たしかにザックスがルターの思想に傾倒していたことは、広く知られたことである。ザックス自身が残した彼の蔵書目録にも、多くのルターやルター派の書籍がみられる¹⁸。しかしいくらこうした事実を並べ立てても、この医者がルターその人であることにはならない。上でも述べた通り、当時の外科医の社会的地位は決して高くはなく、またレムシャート自身はこの医者を「やぶ医者」と考えているのであり、さらにそこにキリスト教以前のシャーマンの権威をみてとっている。そのような人物を、自らが熱烈に支持するルターと重ね合わせるであろうか。さらに、この医者がザックス自身でもあると述べており、さすがに無理のある解釈に思えてならない。

ではこの医者は、いったい何者であろうか？これは素直に流しの外科医と捉えて問題あるまい。しかしレムシャートの言うような「やぶ医者」では決してない。この医者は、患者から金をだまし取るどころか、無償で切開手術まで施し、みごとに病気を根治させているのである。患者の口からも、はっきりと「おお、まことみごとな腕前のお医者さま、あなた様の技が素晴らしいことがわかります。(O herr doctor gar künstenreich, Ich merck: ewer kunst die ist subtil.)」という言葉で、その外科医としての技術が絶賛されているのである¹⁹。

このように劇中の設定通りに登場人物を解釈するとするなら、おそらく問題となるのは、この医者が何者であるかというよりも、むしろ彼の医療行為が何を表象しているのかということであろう。上述のごとく、この患者の病気は七つの大罪を阿呆として可視化したものであるため、患者が自分の病気について医者に相談するということは、患者による罪の告白を意味し、医者が阿呆を摘出して病気を治し、その罪の象徴を下

17 Ibid., S. 78. レムシャートはこのイメージを以下の文献から引用している。
Buchwald, Reinhard (Hrsg.): *Luther im Gespräch*. 1. Auflage. Frankfurt am Main: 1983, S. 165. 残念ながら私は本書を参照することができなかった。

18 藤代幸一（編訳）『中世の笑い—謝肉祭劇十三番—』、法政大学出版局、1983年、232-240ページ。

19 Keller u. Goetze (1870), S. 16; Goetze (1880) S. 144.

男がペゲニッツ川に投げ棄てるというのは、告白された罪に対して医者
と下男が赦しを与えることになるであろう。キリスト教において、信徒
が自らの罪を告白し、それに対して赦しを与えること自体はめずらしい
ことではない。しかしカトリックにおいては、この一連の行為は「告解
の秘蹟 (sacramentum poenitentiae)」と呼ばれ²⁰、司教または司祭（聴罪司
祭）によって執り行われる重要な宗教的行為である。謝肉祭は四旬節直
前の3日間に催されるのだが、古くからこの期間は告解の秘蹟を行うこ
とになっており、しかも大罪は告解の秘蹟を通じてのみ赦しを得られる
とされていたのである。

ではなゆえザックスはこの行為の実践を、社会的地位が低く、しか
も聖職者ですらない流しの外科医に委ねているのであろうか？これにつ
いては、彼の神学的立場から説明が可能であろう。すなわち敬虔なル
ター派プロテスタントであるザックスは、ルターの根本的主張の一つで
ある「万人祭司」の立場から、本作品を創作したのであろう。ルターは
いわゆる宗教改革三大文書において万人祭司を様々な角度から論じてい
るが、ここでは1520年に初版が刊行された『キリスト教界の改善につ
いてドイツ国民のキリスト教貴族に与う』および『教会のバビロン捕囚
について』を取りあげ、該当箇所を検討を行い、我々の「外科医」との
関連を考察したい²¹。

20 第2ヴァティカン公会議後の1978年に発行された新しい儀式書 (Ordo
paenitentiae) の日本語版では「ゆるしの秘蹟」という名称を採用し、以後、我が
国におけるカトリック教会ではこの訳語を用いている。本稿では、一般名詞とし
ての「赦し」も多く使うため、読者の混乱を避けるべく、古くから知られた「告
解の秘蹟」という訳語を用いる。

21 ルターの両著作については、ワイマール版 (全集) にアクセスできなかったた
め、クレーメン版 (選集) を用いた。Clemen, Otto (Hrsg.): *Luthers Werke in Auswahl:
Unter Mitwirkung von Albert Leitzmann*, 6. Auflage. Bd. 1, Berlin: 1966. また以下の邦訳
を参照した。松田智雄 (責任編集)、『ルター』(世界の名著23)、中央公論社、
1979年。深井智朗 (訳)、『宗教改革三大文書 付「九五箇条の提題」』、講談社、
2017年。本稿への引用・要約に際しては、主として深井氏の訳語を用いるが、解
釈の違いおよび文体上の都合から適宜修正したことをあらかじめ断っておく。そ
の他に以下も参照した。万人祭司に関する論点を明瞭に整理しているため、本稿
の主題において非常に有益である。山辺建「キリスト教における祭司と司祭—M.

ルターは『キリスト教界の改善について』において、26の改善点（第2版以降は27）を列挙しているが、その前提として「ローマ主義者（die Romanisten）²²」の築いてきた「三つの砦（drey mauren）²³」を論駁する中で、聖職者身分の非聖職者身分に対する優位性を明確に否定しており、その際に万人祭司に関する主張が述べられる。まず、教皇・司教・司祭・修道士たちが霊的身分（geistlich stand）と、諸侯・王・手工業者・農民が世俗的身分（weltlich stand）と呼ばれて区別されているが、すべてのキリスト者は霊的身分に属しており、それを区別するのはそれぞれの職務の違いだけであると説く。すなわち、一つの洗礼、一つの福音、一つの信仰をもっていることが最も重要であり、これらが皆を霊的なものにし、キリスト者としているのだという。また『ペテロの手紙一』第2章および『ヨハネの黙示録』第5章を根拠に、誰しものが洗礼によって祭司として聖別されていて、これは教皇や司教らが与えるよりも高次の聖別であるとしている²⁴。そして必要な場合には、誰でも洗礼を受け、罪の赦しを宣言するとして、以下のような例を挙げる。

信仰の深い信徒たちの小さな群れが捕らえられ、司教によって聖別された司祭がいらない荒野に放置されてしまったなら、そのときには既婚者であるか独身であるかなどは問われず、誰か一人を今いる人の中から選び出し、その職務に就けないでしょうか。そして、その

ルターの万人祭司をめぐる一」、『京都産業大学論集』、第21巻、第3号（人文科学系列第19号）、1992年、260-338ページ。

22 当時しばしば使われた語で、「ローマ派」とも訳される。深井氏によれば「教皇の権力、とりわけ教皇至上主義を支持して、その権力に基づいた既得権を手に行っている聖職者や神学者」のことを指す（深井 2017年、177ページ、訳注11）。

23 ルターの言うところの「三つの砦」とは、以下の三つの主張のことである。①ローマ主義者の誰かが、世俗の権力によって迫害されるなら、世俗の力には彼を支配する権利はなく、教会の力こそが世俗の力の上に立つ。②ローマ主義者の誰かが、聖書の教えによって断罪されようとしても、それに反対して、教皇以外は誰も聖書を解釈する資格をもっていない。③ローマ主義者の誰かが、公会議によって糾弾されても、それに反して教皇以外は誰も公会議を招集することはできない。Clemen (1966), S. 366（深井 2017年、52-53ページ）。

24 *Ibid.*, S. 366-367（同上、54-55ページ）。

人を司教や教皇が選んだ者と同じように本当の司祭として認め、その人は洗礼を受け、ミサを執行し、罪の赦しを宣言し、説教することを命じられるに違いありません²⁵。

このように述べた後でルターは、歴史的にみても、実際に儀式を伴わないこうした仕方であグスティヌス、アンブロシウス、キプリアヌスは司教となったが、今やローマ主義者たちが教会法の規定によって、洗礼の恩恵とキリスト者がかつ大きな力を取りあげてしまったのだという。さらに世俗の権力をもつ者たちも、聖職者らと同じ洗礼を受け、同じ福音をもつのであれば、この者たちを祭司であり司教であると認めなければならず、この者たちの職務をキリスト教会に対する正当な権能をもつ有用なものであるとみなさねばならないと主張するのである²⁶。

以上のようにルターは、中世を通じて構築された聖職者身分のもつ特権階級的性格をことごとく否定し、世俗の者たちにも霊的な権能を認めたのである。それでは罪の赦しを与える告解の秘蹟については、いかなる主張を展開させているのか、次に『教会のバビロン捕囚について』をみていきたい。

ルターはカトリック教会の執り行う七秘蹟のうち、最終的に聖体（聖餐）および洗礼の二つのみを認めたが、『教会のバビロン捕囚について』の中では、告解も秘蹟として一応は認めている。ただし、教会で執り行われている告解は、痛悔（*Contritio*）・告白（*confessio*）・罪の充足（*satisfactio*）という三つの部門に分かれており、痛悔を善き業として信仰にまさるものとしたため、信仰が欠如しているとして批判している²⁷。

25 *Ibid.*, S. 367（同上、55 ページ）。

26 *Ibid.*, S. 367（同上、55-57 ページ）。

27 この痛悔は、罪の認識・罪の恐ろしさによって為される不完全痛悔であり、不信仰者にも与えられたため、痛悔の全体が破壊されてしまったとルターは述べている。*Ibid.*, S. 480-481（同上、293-294 ページおよび 362 ページ訳注 50）。当該箇所およびその後のしばらくの記述では、問題点の指摘をしつつも告解の秘蹟を一応は認めているが、本書の終盤では、約束がしるしと結びつけられたものが秘蹟であるとし、告解の秘蹟は「神によって制定された可視的なしるしを欠いている（*signo uisibili et diuinitus instituto caret*）」とも述べている。*Ibid.*, S. 510（同上、353-354 ページ）。

また罪の告白に関しては、良心に悩む者たちにとって唯一の慰めになるとして、その意義を認めてはいるものの、聴罪司祭に対して行われる秘密の告白には聖書の根拠がないとして否定している。そして『マタイによる福音書』第18章を根拠に、ある兄弟が一人の兄弟に自らの罪を告白するなら罪は赦されるとし、司祭らに告白する必要性はないと述べている。なぜならば、司祭らはこの告白を自らのうちに保留するからである。罪を告白した者から、神がその者をどのようにして慰めたのかを聞き、この出来事を信仰をもって理解するとき、この者を通して神が自分たちに語りかけたことを知って平安を得られるが、この司祭らによる保留がその機会を奪ってしまい、結果として、巡礼・曲解された聖人崇拜・偽りの聖人伝・業や儀式への過度の依存と執行などの誤った実践へと人々を向かわせるというのである。また、ある人が自らの罪を自発的に、あるいは責められることで告白して赦しを求め、自らを改善しようとするなら、その秘密の罪は赦されるのであり、キリストはすべてのキリスト者に罪を赦す力を与えているのだと主張する²⁸。

罪の充足については、贖宥の問題と絡めて論じており、ローマ主義者の贖宥は真の罪の充足、すなわち生の再生に関する理解が不足していることを指摘する。またローマ主義者は罪の充足の必要性を強調し、罪の賠償が完全になることばかりを勧めており、そこではキリストへの信仰が失われてしまっていることを指摘し、さらにはローマ教皇たちが、罪を売買する者たちをのさばらせていることを非難している²⁹。

上記のようにルターは、教会での告解の秘蹟については信仰の伴わないものとして否定的であるものの、信仰の伴う罪の告白には一定の意義を認めており、また罪の赦しを与えることはすべてのキリスト者に備わる権能であることを示し、贖宥のための金銭の授受を非難しているのである。

以上のルターによる万人祭司を踏まえると、謝肉祭劇史上特異な描かれ方をしている『阿呆の切開手術』の医者への行動が、論理的矛盾をきたさずに理解できる。すなわち、患者とは罪を抱えた一般信徒であり、この者が聖職者でもない流しの外科医に自らの罪を告白し、外科医は下男

28 *Ibid.*, S. 481-484 (同上、297-300 ページ)。

29 *Ibid.*, S. 484-485 (同上、302 ページ)。

とともにその罪の赦しを与えているのである。これら一連のやりとりを可能にしているのは、キリストがすべてのキリスト者に罪の赦しの権能を与えている、というルターの主張である。また、謝肉祭劇における医者多くの多くは金に目のくらんだやぶ医者であるが、この外科医は切開手術の正当な対価すらも受け取ろうとしない。これは当該手術が罪の赦しの表象であるため、それに伴う贖宥に金銭の授受があってはならない、というルターの教えが根底にあるのであろう。まさに宗教改革は、贖宥状販売に異を唱えたルターの『九十五箇条の提題』から始まったことを忘れてはならない。すなわちこの切開手術を通じたやりとりそのものが、カトリック教会への痛烈な批判として描かれているのである。

笑いに潜ませる

さて前章までに、我らが外科医の一風変わった行動が何を意味しているのかが明らかになった。残る疑問は、なにゆえザックスはルターの万人祭司に基づく教会批判をこのようなかたちで展開したのか、ということである。上でも述べたが、謝肉祭劇とは本来的に娯楽として誕生し、発展してきた世俗劇である。『阿呆の切開手術』も、定番である「医者もの」と「阿呆もの」の混交によって創作されており、劇中に多くの笑いの要素がみられる。しかしその根底に潜ませた痛烈な教会批判は、観る者にあえて正確には把握させないよう、定番のモチーフでもって覆い隠しているように思える。なにゆえザックスは、おおっぴらにではなく、笑いに潜ませるという手段を選んだのであろうか。最後にこの問題について、当時のニュルンベルクおよびザックスの置かれていた状況を踏まえて考えたい。

『阿呆の切開手術』がザックスの謝肉祭劇の索引で第11番にあたり、またその制作年代がゲツツェによって1536年と推定されたことはすでに述べた。ゲツツェの見解は、本作の前後の作品の日付と照らし合わせても、ある程度整合性がとれている。というのも、第10番『糸紡ぎ部屋』には「1536年12月28日」と、第12番『ドイツ亭のハム買い』には「1539年11月21日」とそれぞれ日付が入っているからである。索引の通し番号が必ずしも年代順を示すわけではないものの、大方が時系

列に沿っていることから、『阿呆の切開手術』が1530年代後半に書かれたことはおそらく間違いない。

では本作がいつ出版されたかという点、じつはこれも正確にはわかっていない。初版を製作したニュルンベルクの印刷・出版業者フリードリヒ・グートクネヒト (Friedrich Gutknecht) が、奥付に「1555年」という年号を記しているのだが、上述のごとく、ザックス自身がテキスト末尾に記入している年月日が「1557年10月3日」となっているため、どちらかが誤っていることになる。そのため『16世紀ドイツ語圏印刷物目録 (Verzeichnis der im deutschen Sprachbereich erschienenen Drucke des 16. Jahrhunderts)』においても、本書の奥付にある書誌情報として「ニュルンベルク、フリードリヒ・グートクネヒト、1555年」と提示しているが、当該版の印刷年は「1555年頃」と含みを持たせている³⁰。また筆者が唯一所蔵を確認したベルリン州立図書館のオンライン目録でも「16世紀」とあるだけで、特定を避けている³¹。

上記を整理すると、ザックスは『阿呆の切開手術』を1530年代後半に書き上げており、おそらく上演もされていたが、出版物として世に出たのは、早くとも1555年であり、作品の完成から出版までにはおよそ20年の隔たりがある、ということである。このタイムラグが何を意味しているのか、さらには本章冒頭で立てた問い、すなわち、なにゆえザックスはルター的教会批判を観衆に気づかせないように笑いに潜ませたのか、当時の神聖ローマ帝国およびザックスが置かれていた状況を考慮すれば、当該問題の答えが得られるであろう。

1517年10月31日、ルターが『九十五箇条の提題』を発表して以来、改革の波は帝国を越えて西ヨーロッパ中に達した。ニュルンベルクでは、1520年頃からルター支持者が増えはじめ、1525年に都市として正式にルター支持を表明した³²。ザックスはニュルンベルクでは最も早く

30 https://www.gateway-bayern.de/TouchPoint_touchpoint/singleHit.do?methodToCall=showHit&curPos=19&identifier=19_FAST_2120379021 (最終アクセス 2022年1月23日)

31 <https://stabikat.de/DB=1/LNG=EN/CLK?IKT=12&TRM=476720354> (最終アクセス 2022年1月23日)

32 ニュルンベルクにおける宗教改革の導入に関する研究は非常に多いため、いくつかの重要な文献・論文のみを挙げておく。Engelhardt, Adolf: „Die Reformation in

からルター支持に回った人物の一人であり、1523年に上梓した『ヴィッテンベルクの小夜啼鳥』の中で、ときにアレゴリーを駆使して、ときに直接的な表現でルターを賛美し、教皇を批判した³³。それだけにとどまらず、1527年に同じくニュルンベルクで出版されたハンス・グルデンムント (Hans Guldenmundt) による挿絵入りの『教皇制に関する驚くべき予言 (Eyn wunderliche Weyssagung von dem Babstumb)』に詩を寄稿している。書名からも察せられる通り、本書は教皇制を批判する内容であり、また全ページに教皇を揶揄するカラー挿絵が挿入されている³⁴。この作品には、ニュルンベルクの聖ローレンツ教会の牧師であるアンドレアス・オジアンダー (Andreas Osiander) が序文を寄せたこともあり、非常に売れ行きがよく、同年のうちに三度も増刷された³⁵。しかし市参事会は、「当該書籍は民の唆し、ひねくれ、あるいはその他のことがらをより一層引き起こし、様々な状況のもとで市参事会に多様な不利益と憤りをもたらしうる。また当該書籍は、市参事会の知らぬところで、その意に反して出回った³⁶」とのことで、オジアンダーに注意を与え、グルデンムントには当該書籍のすべてと組版を引き渡し、今後は事前検閲

Nürnberg“, Bd. 1. In: *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, Bd. 33, 1936, S. 1-258; Moeller, Bernd, *Reichsstadt und Reformation*, Bearbeitete Neuausgabe. Berlin (Ost): 1987 (森田安一、棟居洋、石引正志訳『帝国都市と宗教改革』、教文館、1990年); Ders. (Hrsg.): *Stadt und Kirche im 16. Jahrhundert*. Gütersloh 1978. また、原田晶子「宗教改革導入にともなう死者追悼儀礼廃止に対する請願—カトリック共同体からプロテスタント共同体への移行の狭間で—」、神崎忠昭編『断絶と新生—中近世ヨーロッパとイスラームの信仰・思想・統治—』、慶應義塾大学言語文化研究所、2016年、185-205頁も参照のこと。

33 藤代幸一『ヴィッテンベルクの小夜啼鳥—ザックス、デューラーと歩く宗教改革—』、八坂書房、2006年。

34 Kapp, Friedrich: *Geschichte des deutschen Buchhandels*, Bd. 1, Leipzig: 1886, S. 573. 本作品はデジタル化されており、自由に閲覧できる。<https://editions.mml.ox.ac.uk/editions/weyssagung/> (最終アクセス 2022年1月24日)

35 Breuer, Dieter: *Geschichte der literarischen Zensur in Deutschland*, Heidelberg: 1982, S. 35.

36 Müller, Arnd: „Zensurpolitik der Reichsstadt Nürnberg: Von der Einführung der Buchdruckerkunst bis zum Ende der Reichsstadtzeit“. In: *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Nürnberg*, Bd. 49, 1959, S. 84.

を受けることを義務づけたのである³⁷。こうして両名は、なんとか処罰を免れたのであった。D. プロイアー (Dieter Breuer) によると、ニュルンベルク市はルター派を宣言したものの、外交政策においてうまく立ち回る必要があり、教皇・教会批判を野放しにしておくことはできなかったのである³⁸。

ザックスに対しては以下の申し渡しがあった。

靴屋ハンス・ザックスには、以下のごとく申し渡す。近頃、榮譽ある市参事会の承諾なしに、世間をよくはしないであろう書籍が出版したが、その書籍にこの者はかの人物に関する詩を寄稿した。だがそれはこの者の職務ではなく、またふさわしくもない。それゆえ市参事会は、この者がその生業である靴づくりに尽くし、今後は書籍あるいは詩を世に出さぬよう命じる。〔従わぬならば〕榮譽ある市参事会は、この者に対し然るべき措置をとることになるであろう。この度行われた行為について、市参事会は今回は処罰を保留するが、事と次第によっては本件を裁判にかけることもある³⁹。

プロイアーによれば、この申し渡しによって、以後ザックスは自己検閲を行うようになり、宗派論争の文書を避け、風刺詩に専念するようになったという。またニュルンベルク当局はその後数十年に渡り、外交上の紛糾の恐れがある場合には、検閲を通じて印刷・出版業に容赦なく介入したが、そうではない場合には比較的寛容であったようである⁴⁰。

グルデメントは『教皇制に関する驚くべき予言』以降も、市参事会から警戒され続けていた。1532年には、よからぬ取引のため2年間の都市追放刑に処され、また1535年には有害な挿絵の入った書籍を流通させた廉で逮捕されている。さらに1539年にも、禁止されていた反教皇の挿絵の入ったポストカードを再び販売している⁴¹。ザックスはグル

37 Ibid.

38 Breuer (1982), S. 36.

39 Müller (1959), S. 84.

40 Breuer (1982), S. 37.

41 Reske, Christoph: *Die Buchdrucker des 16. und 17. Jahrhunderts im deutschen*

デนมントとしばしば仕事をともにしていたため、すでに1527年時点で『教皇制に関する驚くべき予言』に関して市参事会から警告を受けていたこともあり、グルデンムントが頻繁に取り締まられていた1530年代は、おおっぴらに教会批判をするには難しい状況にあったと言えよう。

つまり1530年代後半に創作した『阿呆の切開手術』は、聖職者制度を否定している作品であるため、上演するにあたってその真意を悟られるわけにはいかなかったのである。そこで定番のモチーフを用いた笑いのうちに教会批判を潜ませることで、さらには出版を見送ることで、市参事会の警戒の目から逃れようとしたのであろう。ではおよそ20年もの歳月を経た後に出版に踏み切ったのはどうしてであろうか。そこにも当時の社会状況と密接に関わる事情があったことが推察される。

1555年にドイツ史上、さらにはキリスト教史上極めて大きな出来事があった。この年の9月25日、アウクスブルクにてドイツ王フェルディナント1世と帝国諸身分とのあいだの協定により、一つの帝国法が発布されたのである。「アウクスブルクの宗教和議」と呼ばれる当該法のもとで、支配者の宗教がその領内で行われるというかたちではあるが、カトリックとともに帝国内でルター派が認められたのである。上述の通り、ニュルンベルクは1525年時点でルター派を宣言していたため、当然ルター派の都市として公認されることとなった。このことは、外交上の理由からのみ反カトリック的書物を取り締まっていた市参事会が、帝国内でルター派が法的に認められたことで、以前ほど厳しく取り締まる必要がなくなったことを意味する。つまりアウクスブルクの宗教和議のおかげで、ザックスは何の気兼ねもなく『阿呆の切開手術』を世に出すことができるようになったのであった。ただし彼が書物製作を依頼したのは、グルデンムントではなかったのであるが。

おわりに

『阿呆の切開手術』の登場人物たちは、ルターの教えを実践していた

Sprachgebiet: Auf der Grundlage des gleichnamigen Werkes von Josef Benzing, Wiesbaden: 2007, S. 670-671.

わけであるが、結びの口上では、劇中のような病気にかからぬようにと、次のような忠告が述べられる。

どなたも生きているうちは
分別を師となされよ
己の手綱をしっかり握り、
貧者と富者と、男と女と
悪に染まった人のもとでも
せっせと周りに気を配られよ
思考と言葉と行動を
賢者の教えと忠告に向けなされ！
さすれば誠と名誉にかけて、約束いたしましょう、
先ほどの阿呆どもが二度と育たぬことを⁴²。

謝肉祭は、断食期間である四旬節の前に、たらふく飲んで食ってのどんちゃん騒ぎの祝祭である。この教訓譚は、劇を観ている人たちに対しても皮肉となっているのである。

42 Keller u. Goetze (1870), S. 17; Goetze (1880), S. 145.

Ein ausgezeichnete Arzt oder Quacksalber:
„Arzt“ im *Narren-schneyden* (FSR. 11)
von Hans Sachs und lutherisches
„Priestertum aller Gläubigen“

Atsushi TAJIMA

Fastnachtspiele, die in der Fastnachtszeit gespielt werden, entstanden als weltliche Spiele im 15. Jahrhundert in der Reichsstadt Nürnberg. Der Nürnberger Schuster Hans Sachs, der als Dichter, Meistersinger, Schriftsteller und Dramatiker tätig war, schuf ca. 6,200 Werke, die auch 85 Fastnachtspiele umfassen. In diesem Aufsatz wird sein elftes Fastnachtspiel *Narren-schneyden*, dessen erste Ausgabe um 1555 vom Nürnberger Drucker Friedrich Gutknecht veröffentlicht wurde, behandelt.

Das *Narren-schneyden* besteht aus 380 Verse, in den drei Personen, nämlich Arzt, Knecht und Kranker auftreten. Der Kranke besucht den Arzt, um sich untersuchen zu lassen. Durch die Harnuntersuchung stellt der Arzt eine Diagnose, dass es im Bauch des Kranken sehr vielen Narren gibt. Um sie herauszunehmen, macht der Arzt einen Bauchschnitt, so dass nicht nur verschiedene Narren, die die sieben Todsünden repräsentieren, sondern auch das Narrennest herausgenommen werden können. Der Arzt befiehlt seinem Knecht, dass er alles aus dem Kranken in die Pegnitz wegwirft. Schließlich ist der Kranke von den Todsünden genesen und bedankt sich beim Arzt dafür.

Obwohl „Ärzte“ in Fastnachtspielen meistens als Quacksalber dargestellt sind, ist dies bei Sachs nicht immer so, d.h. man begegnet ab und zu in seinen Werken auch ausgezeichneten Ärzten. Der Arzt im *Narren-schneyden* erhebt keine Gebühren für die Operation. Damit die Bedeutung seines charakteristischen Verhaltens geklärt wird, wird der „Arzt“ unter Berücksichtigung der damaligen sozialen Situation des Heiligen Römischen Reiches und der reformatorischen Ideologie von Dr. Martin Luther analysiert. Diese Arbeiten werden zur Analyse der einzelnen Werke von Hans Sachs beitragen, die wegen der Vielzahl an Texten nur langsam voranschreitet, und

田島 篤史

den kultur- und literaturgeschichtlichen Sinn von Fastnachtspielen im 16. Jahrhundert verdeutlichen.